

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成15年10月5日発行(毎月5日1回発行)  
第43巻10月号(通巻531号)

# 風土

10



03  
えいじ

禁煙の指

神  
蔵

器

衣川早稻の花掛け曇りかな

車窓に置くアルプスの水雲の峰

底紅や誤植一字の燃え立てり

芋の露地獄の釜の開く日かな

白御飯立てり八月十五日

涼風の墓の一つに参りけり  
施餓鬼会に涼風下ろす大欅  
迎へ火焚く百年同じ坂の下  
盆三日おのれ穢れずゐたりけり  
掛籠に宗旦木槿一花かな  
ひらひらと禁煙の指秋の雷  
人逝きて草木にまじる秋のこゑ

# 竹間集

同人作品



夏 萩

島谷 征良

旅人となりたし合歓が咲き出せば  
紫陽花の藍一色の寺領かな  
ががんぼのゐて唇のかわきけり  
ほととぎす縁切寺の深みより  
篠の子や舌にのこりし山の味  
ほろほろと夏萩すでに散つてをり  
生り捨ての枇杷の葉に置く月明り

## 蟻蟻の子

南 うみを

道の神

大竹 淑子

蟻蟻の子にして揺らぎ進むなり  
焼く草の炎は見えず日の盛り  
白鷺の頭が浮かび青田風  
振り籠のやうに蜻蛉交み飛び  
朝顔の咲きのぼりたる虚空かな  
桃を吸ふ鍔広帽の影の中  
かなかなや爪さきだちに灯をともし

つんばらや峠ひとつのかなたは海  
高空の辺り風なき山法師  
ひとときを晴れてや梅雨の蝶の道  
小屋内に刃物研ぎゐる大南風  
黒南風や岬の穂草の折れやすく  
みんみんや背山の奥に水湧ける  
夏草を刈り残してや道の神

大暑

齊藤 小夜

雲の峰

宮川みね子

大暑かな脱ぎたるシヤツの裏返し  
初蟬や筆の先より句の生れ  
大木の影倒れ込む蟻地獄  
みちのくの無人灯台夏怒濤  
松坂の職人町や水を打つ  
緑蔭の骨董市や花市や  
真二つに山を断つごと滝落つる

傘立の水を捨てたる桜桃忌  
一塊の風を映せりひつじ草  
初蟬や筆たをやかに晶子の書  
山の雲夕べのいろに青山椒  
七月のヒマラヤ杉は翼延べ  
雲の峰銀行三時シヤツター降り  
いまいちど墨の手洗ふ晩夏かな

秋に入る

徳丸 峻二

稻架低し

浜 明史

両の手に子を引き歩く花夕顔  
甲板に並ぶ白服大暑かな  
脇道に逸れし話や心太  
秋風やベン握りぬし掌を開く  
台風の目の中にありナイフ研ぐ  
エスカレーター西瓜提げたる客並び  
飲み干して折るストロー原爆忌

喫煙を至福の刻に原爆忌  
鎮魂の風雨やはらぐ長崎忌  
港内の潮盛り上がる颶風過  
盆用意手持無沙汰の時流れ  
村老いて稻架低くなる田圃道  
繼ぎ接ぎの障子に影の茶立虫  
瓢の実や白膠木の文褪せて

## 深 秋

—島谷 征良—

柿をとる年季の入りし竿と人  
色変へぬ松のみならず杉と楨  
下り築半日何も乗つて来ず  
山の田になかば朽ちたる僧都かな  
どびろくや歯のなき杣のよき笑顔  
山門に入るに木の実を踏むことよ  
顛顛にあたりぬ妻の秋日傘  
松手入梯子を垂るる命綱  
夜景見に來し山頂は霧の中  
投げられし槍のごとくに流星群

冷まじや川さかのぼる潮の音  
アクセント迷ふ一語や秋深し  
破れつつもなほ飛べさうな芭蕉かな  
病院行火葬場行と毒きのこ  
鳥瓜鳥の食はぬ朱さにて  
菊人形封建の世をうつくしく  
鳥威日照雨を加へひらめけり  
茱萸熟るる日曜だけの渡し舟  
十月やまた嵐めく風の中  
楓櫨の実色づき年も深むなり

# 山河集

同人作品



神藏 器選

因幡国府町にて

家持の国府 庁跡 田水 沸く  
神さびの宇倍野陵墓の夏木立  
狂はねばおもひの遂げず夏の蝶  
中干しの三日の晴や戻り梅雨  
三伏やとどめのきかぬ旅ごころ

平田 安生

峰雲や回転ドアを弾み出で

中根 美保

信号を水着のままに見て渡る  
波乗りの次々に立ち滑り出す  
ヨツトの帆ひとつが群れを離れゆく  
江ノ電と軒を接しぬ釣忍

中村 洋子

かなぶんぶん遠くに馬の水飲場  
七月のガラスの函の喫茶室  
地に伏せるひとこぶ駱駝雲の峰  
日蓮の大坂の蟬しぐれ  
向日葵や外人墓地の鉄格子  
夕立来る阿夫利神社のこま参道  
「一隅照らす」碑ありて百日紅  
白南風や甲府盆地の美術館

及川 澄江

思ひごとまとまらなくて草を引く  
参禅の筆の記帳や蟬しぐれ  
薄暮かな力サブランカに雨の糸  
先生のうしろの空の夕焼けて  
行く夏の魚拓のまなこ大き  
かり信長の自刃の寺の大夕立

林 裕子

# 風土独語／神藏 器



家持の国府跡田水沸く

平田 安生

大伴家持は安麻呂の孫、旅人の長男である。きわめて恵まれた環境に育ち、順調な人生を思わせたが、四十歳ごろからはいくたびか左遷を重ねる後半生であった。

家持が因幡守として地方にくだらなければならなかつたのは、天平寶字三年正月で、これも藤原氏の他氏圧迫が大伴氏にまで及んで来たことを示すものである。家持は一族に自重を説き、困難な政治情勢に苦慮しつつ赴任地因幡、今日の鳥取県岩美郡国府町の国府厅にむかつた。

新しき年のはじめの初春の

今日ふる雪のいやしけよごと

これは因幡守赴任の翌春、元旦に詠じた歌であるが、この歌を最後に、万葉集に彼の歌は見えない。

家持が亡くなつて千二百余年、国府跡は田野と化し、今は青田となつて、夏の強い日射しに田水が熱く沸いているばかりである。

思ひごとまどまらなくて草を引く

林 裕子

梅雨晴や大阪色の服を着て

浅田 光代

俳句は賜わるものというが、それは結果であつて、俳句はきわめて能動的なものである。揮身の力で体ごとぶつかって行く。しかし、全力でぶつかれば、相手は逃げるか、うまくいっても独りよがりの句になるであろう。そこで作句に当つては「己を消すこと、己を離れ無心になつて「物」に入ってその微の顕れて情感するや句成る」（三冊子）ものでなければならない。

自らの体を動かすことによって呪縛を解き、「草を引ぐ」ことによつて無心の境地を得ようとしたことは賢明であつた。女性であれば「髪洗ふ」などとしてもよいようであるが、それでは常識的になり甘くなつて、完全に無心に達し得ないであろう。

雲の峰深層水の土産かな

島 玲子

深層水は低層水と上位の中層水とに挟まれ、水深約一〇〇〇～四〇〇〇メートルにある低温高密度の巨大な水塊。南極大陸周辺や北大西洋北部の表層水が冬季に冷却され沈降して出来たと考えられている。

今日、ミネラルやいろいろの含有物が体に良いと、飲料水として注目され、またある銭湯では浴槽の一つに深層水を用いて人気を得ているそうである。  
掲出句は深層水を土産に提げてゆく作者であるが、「はるかに」とか「明るき」といった形容詞を使いたくなるところを事実だけ表現したため、強い余情が生まれた。何でもないようだがうまい句である。

大阪色とはどんな色なのであろうか。大阪を知らない私には全く解らない。しかし選者としては自分が未知なもの、また体験していないくとも佳句は佳句として採れなければ選者は失格でないかと思う。大阪色は知らなくても、作者が大阪色と言いきり、作者の審美眼に同調でき、そこにまことの詩を感じるなら私は採り上げる。

京都は衣装、大阪は食物と昔から言われて來たが、現代の大阪人の衣装は思い切り派手になつて來ているのはなかろうか。私たちの年齢、また大阪を知らない者は、西鶴の世界、難波のイメージに固執しているが、関西空港が出来、空の玄関口でもある大阪は新しい大阪の色がすでに定着しつつあるのであろう。

### 河骨や風の見つけし花ともる

南奉  
栄運

俳句は内容と表現とどちらが大事かといえば、どちらも大事だが、しいて言えば表現である、と波郷は言つてゐる。

スイレン科の多年草である河骨は、池や沼などの水面に隙間のないほど緑の濃い葉を広げている。七月ごろ緑色の花梗を水面に出し、その頂きに黄色の径三センチぐらいの花を開く。多くは葉陰にかくされて見えないが、吹き立つ風によつて葉がゆれ、葉のゆらぎによつて葉陰の黄金の可憐な花が見えたたりする。

「風の見つけし」はうまい。「謂ひ応せて何かある」（去来抄）、この句には純粹な作者の感動がある。

### ウォータードアに魚の泳ぐ巴里祭

遊橋恵美子

ウォータードアを私は知らない。しかし見たことがなくても想像はつく。「魚の泳ぐ」がうまい。ウォータードアでは魚の泳ぐのは当然のことであるが、作品の上では当然ではない。ウォーター ドアのひらひらと泳ぐ魚によつて、生き生きと巴黎が近づき、シャンソンが流れ、アナ・ベラの可憐な美しい顔がそこにある。当時のパリにウォータードアなどしゃれたものは勿論無かつたが、思いの飛躍は自由である。

### 縁のなき墓の毛虫を払ひけり

大森 美恵

毛虫の好きな人はあまり居ないであろうが、縁もゆかりもない全く他人の墓に毛虫を見たとき、作者は本能的に毛虫を払つてしまつた。ふと作者というより女の一面を見る気がした。

### 黒南風や谷戸の捨て甕共鳴りす

近藤幸三郎

掏出句の黒南風の強さはまさに荒南風である。しかし「捨て甕共鳴りす」に焦点を合わせ強調するために黒南風にとどめた。作句上の配慮はさすがである。

### 玫瑰や海より雲の立ち上る

布施まさ子

玫瑰といえば草田男の「玫瑰や今も沖には未來あり」を思い出す。沖に積乱雲がむくむくと育ち刻一刻と立ち上る。玫瑰は点景。余計なことは言わないので句は大きく迫力あるものになつた。

# 風土集



## 神藏器選

ウオータードアに魚の泳ぐ巴里祭

東京

遊橋惠美子

古民家に大ひまはりの直立す

白南風や「タビビトの木」に名を刻む

香水のここ一番は失せてをり

香のもの喰むよき音のして立夏かな

雨上る三条河原に川床の材

高楓

黒南風や谷戸の捨て甕共鳴りす

銀粉を死装束に灯蛾の舞ふ

日に背くひまはり伐らる比企が谷

掌の形の軍手置かれし菖蒲園

鉢祭果て荒縄のどかとあり

雷一つ鳴つて「細道結びの地」

川床の出て京のととのふ夕べかな

「百万本の薔薇」てふ薔薇の一花咲く

実あんずや「丁字家」五寸の板看板

たましひの螢のもてる息づかひ

ががんぼや甘味処に古道具展

玫瑰や海より雲の立ち上る

汗滲む背につかまりぬ渡し舟

「レンガ倉庫」一塊となる日の盛り

山門に今日の高さの木槿咲く

風入れの昆虫図鑑に目を通して

玫瑰や北に赴任の友のあり

ベランダの青きトマトを数へけり  
蛇の鐘楼下りきるを待つ  
帆舟にもたれ舟虫散らしたり  
雨上る三条河原に川床の材  
川床の出て京のととのふ夕べかな  
鉢祭果て荒縄のどかとあり  
はればれと立つや茅の輪の向う側  
夏まつり少年いつも灯のそとに  
縁のなき墓の毛虫を払ひけり  
汗滲む背につかまりぬ渡し舟  
帆舟にもたれ舟虫散らしたり  
蛇の鐘楼下りきるを待つ  
ベランダの青きトマトを数へけり

尼崎

大森美恵

三鷹

布施まさ子

高楓

浅田光代

藤枝

間島あきら

近藤幸三郎

横浜